ＩＳＳＮ　0919-0783

若狭歴民だより

第　２　号
１９９３年３月

ごあいさつ

春一番が吹く前後，冬木立の冬芽は，にっこりとして，花芽に変わる。

厳寒に負けまいと，虫や小鳥に犯されまいと，ピンチヒッターの副芽を従えて，ひっそりと，寒さの中に息づいていた冬芽が，綻びはじめるのだ。

するうちに四月。年度が改まる。

新しいランドセルを背に，一年生が，はしゃぐ。

その頃，人の心の中に，旅心がかけまわる。

西行法師を慕って，各地の桜を眺めにいく旅も，それなりに佳いが，また，陽炎のもえる野の道を，石仏を探すピクニック。春の旅にふさわしい。

石仏そのものは，日本人の心を素直にしてくれる。また，石仏（地蔵さんや道祖神）には，伝説や民話がくっついているのもある。それをさぐるのも楽しい。たとえば，大河原橋（小浜市）のほとりにある地蔵には，団子を供えて拝めば，子どもの寝小便がぴたりと止まるという民話がくっついている。

また，平野(小浜市)には，“イボ(疣)地蔵”がある。泉の中にある，小さいが，雅な地蔵だ。

この地蔵を拝んで，泉の水で，イボを摩する。そして，振り返えらないで戻ってくると，イボは，ころりと落ちているというのだ。

どうして，この地蔵は，イボを落とす力を持っているのだろう。戻ってくる時，振り返るとどうして，駄目なのか。わからない。

それから，この地蔵の前を流れる泉は，門前の明通寺の近くの淵（松永川）から地下を流れてくるという。東大寺の若狭井（お水取りの）を小さくしたような伝説だ。どうしてこんな伝説が生まれたのだろう。

『若州管内社寺由緒記・同寺社什物記』に因ると，“イボ地蔵”のある平野村の桜大明神宮の別当は明通寺で，「自レ古祢宜無レ之，御供田三反五畝有レ之と申 伝 候」とある。

“イボ地蔵”の泉の伝説は，明通寺の住職（法印さん）が氏神様の別当であったという事から，生まれたのかも知れない。このように，石仏の誕生説を訪ねる旅も，また，楽しい。

平成５年３月１５日

福井県立若狭歴史民俗資料館
館長　山本和夫

帝釈寺古墳群調査概要

美浜町教育委員会

はじめに

福井県三方郡美浜町佐田に所在する佐田古墳群帝釈寺支群（以下，帝釈寺古墳群と呼ぶ①。第１図１）では，以前から埴輪の出土する事実が知られていた。昭和52（1977）年には，若狭考古学研究会による部分的な試掘調査も実施されている。現在，各古墳は削平や改変が激しく，それぞれの墳丘の正確な位置や範囲の確定こそ困難であるが，それとおぼきし２箇所の隆起が，佐田１・２号墳として『福井県遺跡地図』に登載され，周知の遺跡となっていた〔文化庁1980〕。

ところが，この遺跡上に位置する老人会館ならびに帝釈寺が，同じ遺跡内の隣接箇所に移設されることになり，平成４（1992）年11月，美浜町教育委員会（森本克行・加茂知之担当）は改築工事に伴う遺跡存否の確認調査を，福井県立若狭歴史民俗資料館と地元佐田区の協力を得て，同月10～13・24日の５日間実施した。その結果，削平された古墳とその周溝から多数の円筒埴輪・人物埴輪等を検出した。とりわけ人物埴輪は，北陸地方では類例がきわめて希少であり，わけても県下では確実な初出例であることから，話題を呼んだ。

以下，今回の新知見の重要性に鑑みて，調査の概要を報告する。

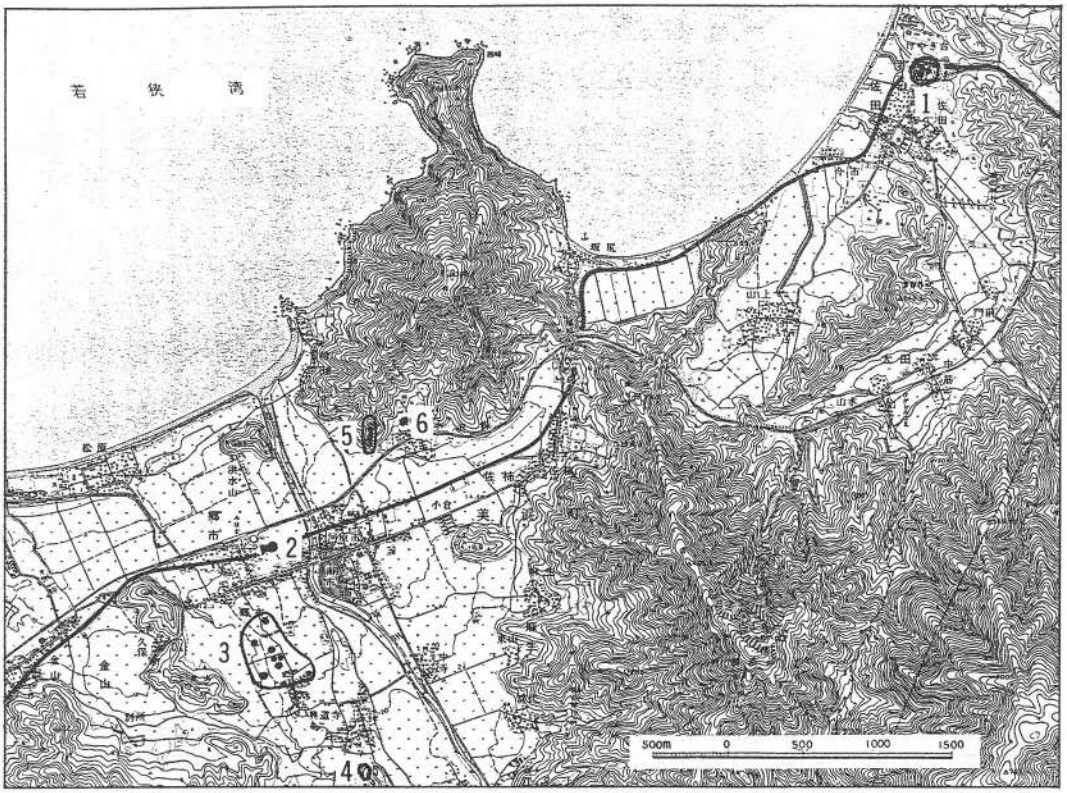
１．周辺の古墳時代遺跡

美浜町は若狭国（７市町村）の東部に位置する。

美浜町郷市（ごいち）には，かつて７基の古墳が分布していたという。だが，現存するのは獅子塚古墳（第１図２）のみである。本古墳は，三方郡内唯一の前方後円墳（全長約33m）でもある。明治30（1897）年と昭和53（1978）年の２度調査が実施されており，墳丘に葺石・埴輪をそなえる，６世紀前葉の古墳であることが判明している。埋葬設備は北部九州系の横穴式石室で，副葬品としてメノウ勾玉・水晶管玉・ガラス小玉・鉄剣・三環鈴・鉄鎌などや，須恵器（坏・坏蓋・高坏・瑞・壺・台付壺や角坏等）が出土している〔入江・森川1981〕。

その南方の同町興道寺（こうどうじ）には，大半が径10m前後の，10余基の後期円墳で構成される興道寺古墳群②（同図３）が所在する。群内の大部分は，昭和51（1976）年の調査で水田下から基底部が検出された，削平された古墳である〔入江・森川1981〕。唯一11号墳は，径約20mのやや大きい円墳で埴輪をそなえるといわれ〔古川1988〕，群内の盟主墳である。古墳群に東接して式内伊牟移（いむい）神社が位置する。

その南東方の丘陵先端部上には興道寺窯跡（同図４）が所在する。昭和54（1979）年の発掘調査で，須恵器（角坏を含む）と埴輪を併焼し，獅子塚古墳へ製品を供給した窯であることが判明している〔入江1986〕。



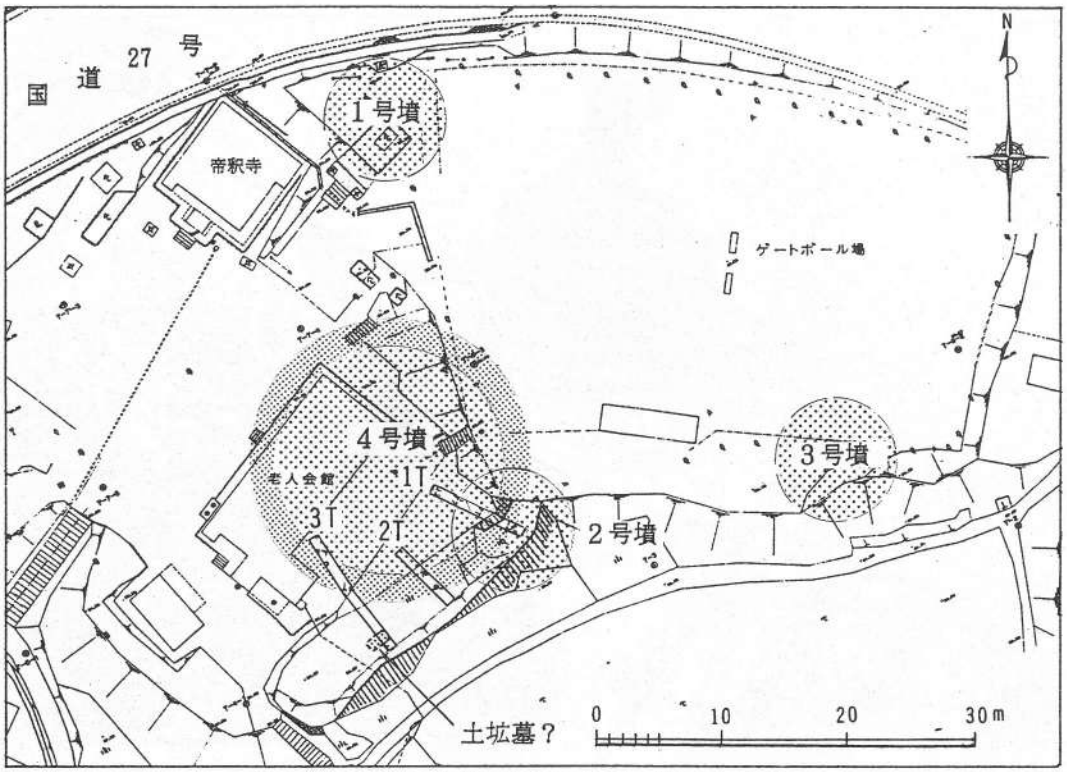
第１図　美浜町主要古墳時代遺跡分布図（縮尺 1/50,000　国土地理院「美浜」図幅分載）　1 帝釈寺古墳群　2 獺子塚古墳　3 興道寺古墳群　4 興道寺窯跡　5 木野古墳群　6 木野神社古墳

同町木野（きの）の丘陵先端頂部には，径10m前後の５基の円墳からなる木野古墳群（同図５）が，一方山麓部には単独の円墳の木野神社古墳（同図６）が所在する。後者は横穴式石室が露出する後期古墳である。前者は時期未詳であるが，丘陵上という立地や墳丘の観察所見からすると，前～中期古墳の感がある。北東接して式内木野神社が位置する。

ところで，今回調査した帝釈寺古墳群の所在する佐田地区は，若狭国の東部に相当する美浜町内でももっとも東端部に位置する。ここから，谷沿いに南東行して越前国との国境である関峠を越えれば敦賀市に至り，また，湾岸部に沿って北東行すれば敦賀半島の先端部に至る。ちなみに，帝釈寺１号墳に北接する箇所が道路の分岐点である。すなわち，帝釈寺古墳群は，まさにこうした交通の要衝の地に位置する。

２．調査概要

今回の調査は，帝釈寺ならびに老人会館の建設予定地である台地南部にトレンチを設定して行うこととした。実施にあたっては，該当箇所が藪であって，既に遺物の出土層位の相当深いことが判明しており，かつ，日時等の関係上，上土を重機を使用して排除し，包含層確認後人力で発掘した。まず前回の調査箇所に第１トレンチを設定，溝を検出し，溝内の埋土に埴輪の包含を確認した。その後，溝の広がりを確定すべく，南西方に順次第２・第３トレンチを設定



第２図　帝釈寺４号墳調査位置図（縮尺 1/600）

した（第２図）。

第１トレンチは，前回の調査箇所のＡ地区，すなわち帝釈寺２号墳と呼ばれる古墳の墳丘中央部付近から北西方にかけて設定した。トレンチの長さは約８ｍ，幅は約0.8ｍである。ところが，当初の予想に反して墳丘下からも溝が検出されるなど，北西部・中央部・南東部の都合３条の溝の並列を確認しえた。南東部の溝は帝釈寺２号墳の墳頂下約3.2ｍに位置し，幅約3.2ｍを測る。溝内に柱穴１箇所が所在する。埴輪は，既に前回の調査で採集されていたため，ごく少量が出土したにとどまった。

第２トレンチは，第１トレンチの南西方約６ｍ離れた位置に設定した。トレンチの長さは約5.8ｍ，幅は約0.8ｍである。その結果，トレンチの中央部で１条の溝を検出した。溝の幅は約2.5ｍを測る。溝の内外両縁部に各１箇所の柱穴が所在する。溝の埋土からは多量の円筒埴輪片の出土をみた。

第３トレンチは，第２トレンチのさらに南西方約５ｍ離れた位置に設定した。トレンチの長さは約11.5ｍ，幅は約0.8ｍである。その結果，トレンチの北西部で１条の溝を，南東部で土坑墓かと思える１基の土坑の断面を検出した。溝の幅は約4.5ｍを測る。同様に溝の内外両縁部に各１箇所の柱穴が所在する。溝の埋土からきわめて多量の円筒埴輪片や２体の人物埴輪頭部，３個体分の須恵器破片の出土をみた。

３．出土遺物

今回の出土品はその大部分が未整理である。よって，それらのうち顕著な品である第３トレンチ出土の人物埴輪や須恵器，ならびに円筒埴輪の断片の一部を紹介するにとどめる。

人物埴輪（第３図１～３）

人物埴輪１（第３図１）　１は，頭部のみであるがほぼ完存する。現存高19.9cm，頭頂部最大幅13.1cmを測る。土師質で砂粒をかなり含み，赤褐色を呈し，焼成はやや不良である。鼻梁は別な粘土を接着し，両眼と口は顔面を杏仁形に切り抜いて表現している。眼の上でまぶたに相当する箇所にはそれぞれ弧状の線刻文を施しており，二重まぶたを表現したものと思える。眉毛の表示はない。両耳は，一般的な粘土を接着することによって作り出したものではなく，渦巻き状の凹線で表している。頭頂部には扁平な半円形を横に接合している。この半円形の背後にあたる頭頂中央部には，上面形が半円形の穴が埋め残されている。

頭部本体の製作手法について説明すると，頸部から眼の直上付近までは粘土紐を巻き上げて製作している。そうして，それより上部は，前面は半円形の板状粘土を接合し，背面は粘土紐を半円形に積み上げて形成したものである。

人物埴輪２（第３図２・３）　２は，やはり頭部であるが人物埴輪１とは異なり，顔面を主にその上半部を欠失する。しかし，頸部や右肩部の一部が遺存する。現存高16.6cm，同最大幅12.4cmを測る。土師質で砂粒をかなり含み，赤褐色を呈し，焼成は普通である。顔面では，右眼から口下部までや鼻梁が遺存する。口の形状は「へ」の字状に近い。右肩は斜め上に立ち上がって折損しているので，右手を上げていたものかと思える。

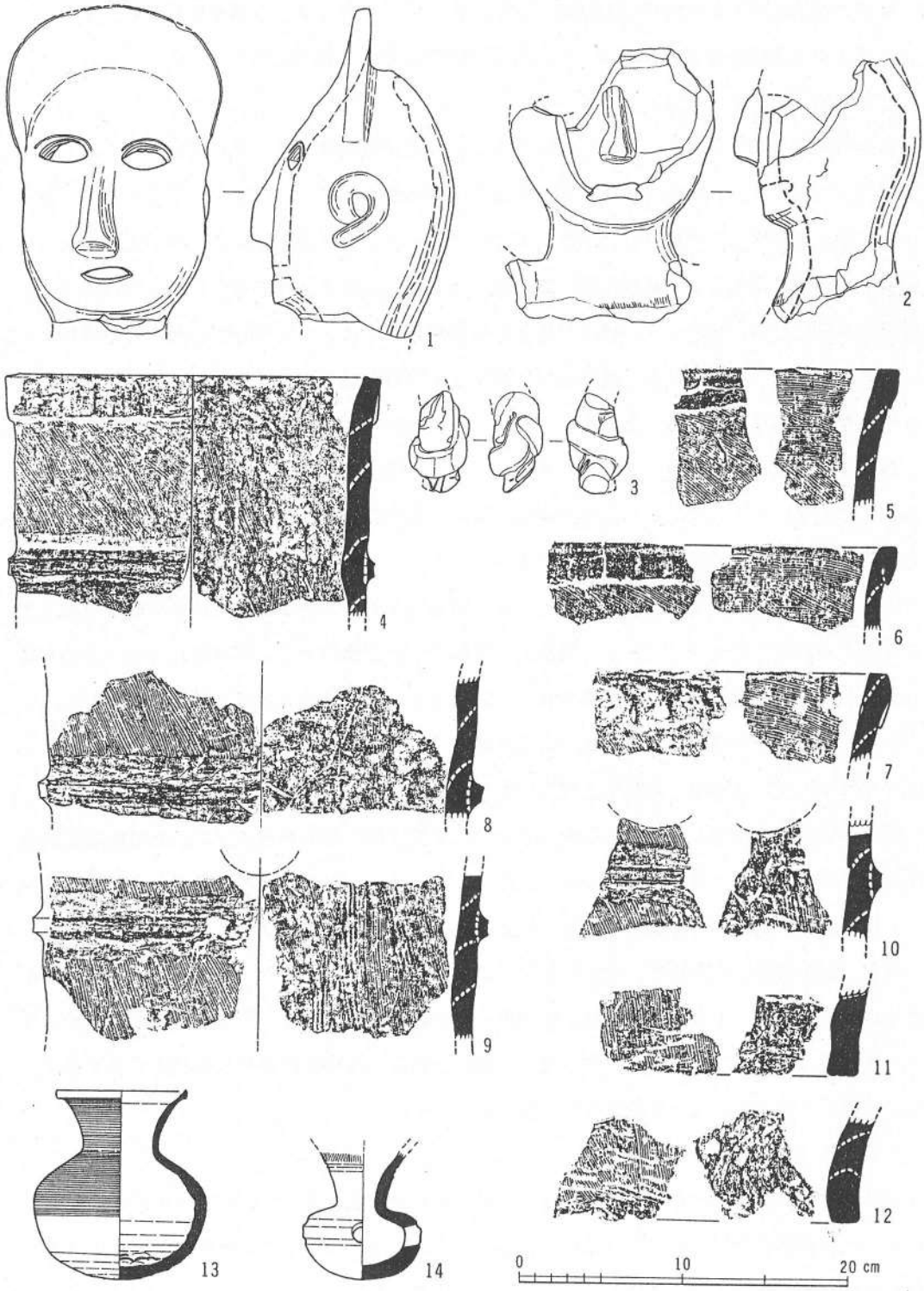
製作手法は１と近似し，頸部から眼の直上付近までは粘土紐を巻き上げて，その後頭頂部を接合している。とりわけ，後頭部の破断上部には，あたかも須恵器坏の「受部」や「たちあがり」状を呈する剥離箇所の遺存をみる。胸上部前面には縦のハケ目調整痕が残る。

なお，形象埴輪の小断片で，出土位置や形状・色調等から人物埴輪２の美豆良ではないかと思える品３がある。１本の細長い粘土紐を長・短の二つに折り曲げ，一方の長い方を帯状に横に一周させ，端部をはね上げている。他方の端部の側面には縦の線刻文３条が描かれており，髪の表現かと思える。上・下両端面とも剥離面をなす。

円筒埴輪（第３図４～12）

各部位の代表的な断片９個を図示する。いずれも２次調整を欠く。内外面はタテハケないしナナメハケ調整するが（４・７～12），一部の口縁端部内面にはヨコハケ調整を施している（５・６）。さらに，内面は縦のユビナデ調整を加えている。

４～７は口縁部を中心とする断片である。帝釈寺４号墳出土の円筒埴輪は，確認しうる限りではいずれも口縁端部に凸帯をもつ。なかでも，４・７のように外面に指ないし工具で断続的に押圧を加え，内面に指をあてた痕跡が残る例が多例を占める。一方，５・６のようにそうし



第３図　帝釈寺４号墳出土遺物実測図（縮尺 1/4）　1～3 人物埴輪 4～12 円筒埴輪 13・14 須恵器

た断続的な押圧痕の認められぬ例若干も混在する。

８～10は中間部の断片である。スカシ孔の形は円形を呈する。タガは低いM字形をなす。

11・12は基底部を中心とする断片で，ともに外面にはタタキ目が残る。

なお，５・６・10は須恵質である。

須恵器（第３図13・14）

須恵器は，小型壷・瓶と坏蓋ないしは坏と思える小断片の３個体分が出土している。

13は小型壷である。器高11.6cm，口径8.0cmを測る。口縁部から体上部にかけての外面に弱いカキ目痕が，底部外面にケズリ痕が，同内面にアテ具痕が，それぞれ残る。

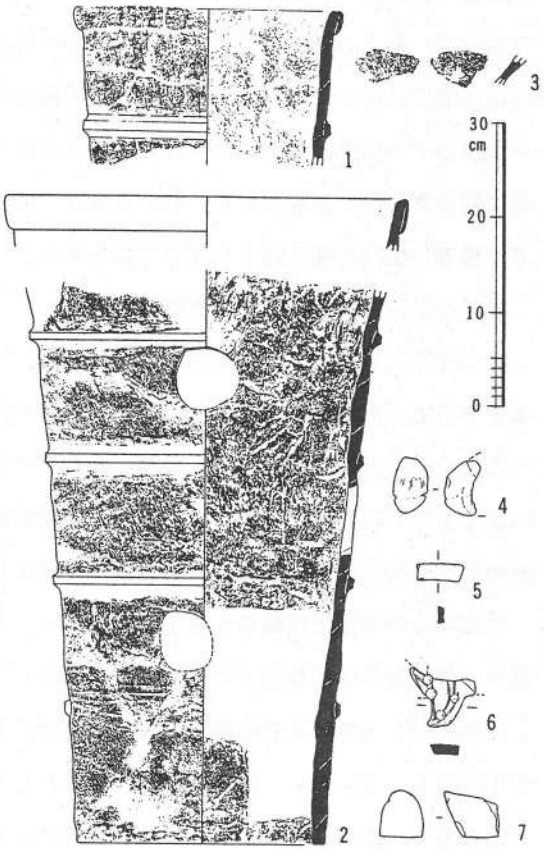
14は瓶である。口縁上部を欠失する。現存高7.8cm，体部径7.2cmを測る。頸部は２条の凹線で区画し，上部は縦の櫛描文をめぐらす。体部は注口部を挟む形に２条の凹線で区画する。

４．まとめ

以上が今回の試掘調査の概要である。第２・第３トレンチで検出した溝各１条と，第１トレンチで検出した３条の溝の内南東部の１条とがゆるい円弧を描いて曲がっており，かつ，溝内埋土の色調や埴輪片を多量に含むという顕著な特徴から，これらの溝は古く墳丘が削平された未知の同一古墳の周溝と推定できる。既往の調査や報告を参考にすると，今次調査以前に帝釈寺古墳群では都合３基の古墳の存在が判明していたことになる。そこで，あらたに確認した本古墳は帝釈寺４号墳と命名した。

周溝の内部に位置する墳丘基底部線から墳形や規模を推定するには，なおより多くのトレンチの設定が不可欠であるが，本古墳は円墳である可能性がまず考えられる。仮に測量図から規模を算出すれば，径約20ｍを測る。

ただし，帝釈寺１号墳出土とする埴輪（第４図）の報告〔古川1988〕がある。当古墳では，帝釈寺４号墳の今回の出土品に類例をみる人物埴輪ではないかとされる断片のほか，馬形埴輪（第４図４～６）・家形埴輪（同７）などの例をみない品，のそれぞれ断片ではないかとされる形象埴輪も混在するが，帝釈寺４号墳とほぼ同様な円筒埴輪が出土している（同１・２）。それらが帝釈寺１号墳に属することにまちがいないならば，小型古墳が埴輪をもつことはき



第４図　帝釈寺１号墳出土埴輪実測図
（縮尺1/8,『六呂瀬山古墳群』より転載）

わめて稀で，かつ同１号墳と同４号墳の埴輪の類似から，前方後円墳の可能性をも考えねばならない。その場合には，帝釈寺４号墳が後円部，同１号墳が前方部となる蓋然性が強い。

ところで，各トレンチの周溝の内外両縁部では柱穴の痕跡を検出しえた。それは，昭和52年の調査で，第１トレンチの北方に設定されＢ地区と命名された箇所でも同様である。よって，本古墳には土製の埴輪だけではなく，木製樹物（いわゆる木製埴輪）も樹立されていたことを推察しうる。ちなみに，近年こうした木製品樹立の確認例は増加しているが，同様に周溝の内外両縁部に柱穴の並立を検出しえた例には，神奈川県軽井沢１号墳がある〔高野1987〕。

帝釈寺２号墳は，今回の調査では墳形や規模を確定する根拠を得ることができなかった。ただ，本古墳は前方後円墳とみる説〔古川1988〕が提起されていたが，その可能性は乏しく，円墳と考えるのがより穏当であろう。そうして，墳丘が帝釈寺４号墳の周溝上に重複しているので，同古墳より後出するものといえる。なお，墳丘北東部に埋葬設備の一部と思える石材が露出している。埴輪は確認しえない。

さて，今回図示した各遺物は，第３トレンチ周溝埋土下部のごく狭い範囲で混在して出土した品である。

埴輪は基底部の外面に平行タタキ目をもつので，須恵器技法で製作されたものである。タガの形状は，県下の既出例では武生市岡本山１号墳の埴輪〔中司1992〕や上中町十善ノ森古墳の埴輪〔高橋1991〕に近似する。いずれも川西宏幸編年〔川西1978〕のＶ期に相当する。

須恵器の小型壷は類例の希少な器種であるが，６世紀前半に属するものかと思える。また，瑠は同後葉に属す。若狭地方における埴輪の消滅は６世紀中葉なので，前者が古墳築造時の品で，後者は後代の混入品とみなしておきたい。

すなわち，埴輪や須恵器の特徴から総合して，本古墳は６世紀前半の築造であろう。

ところで，県内約4,000基といわれる古墳の内，埴輪をもつことが判明しているのは，大型古墳を中心とした57基である。そのうち，若狭地方の古墳総数は約1,000余基といわれ，埴輪をもつことの確認例は28基である。ただ，これらの確認例はほとんどが偶発的な埴輪の断片の採集によるものではある。一部に家形埴輪や蓋形埴輪等を混じえるものの，大部分は円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）で，確実な人物埴輪は発見されていない。

帝釈寺４号墳出土埴輪のうち１体の頭部は，まぶたに横の細線が引かれ二重（ふたえ）になっている事実や，普通両耳は別な粘土で作り出すのだが，本例では耳の形に太い線を彫り込んで表現している事実は，通有の人物埴輪とは異なる特徴である。この頭部は半円形の髪形の後に接して縦の１孔をもっているが，埴輪焼成時の火まわりを良くするための処置であろう。

ところで，わが国ではこれまでに15体③の力士埴輪の出土例がある〔塚田1988〕。腰部が遺存する例ではいずれもマワシを締めていて，それが力士像とする根拠になったわけである。ちな

みに，その一部にはへその孔の表現があって，裸体であることが明らかな例があり，また，逆に服の上からからマワシを締めた例もある。頭部は帝釈寺４号墳のような半円形の髪形を頂部に横に表現した例が多く，鉢巻き状のものを締め髪は後頭部に垂らした例も一部にあり，こうした主に２種からなる。今回の出土品は，髪形から前者のグループに属する力士像であろう。そうして，力士埴輪としてはわが国でも古い部類に入る品である。

なお，現在の相撲髷には上位力士と下位力士とを分ける大銀杏髷（おおいちょうまげ）と丁髷（ちょんまげ）の２種がある。力士埴輪に見られる２種の髪形が，すぐさま現行の相撲髷と同様になんらかの力士間の差異を示しているものではないか，と想定することはあまりにも短絡的な感が否めないが，いずれであれ興味深い。

ところで，体の全体像がわかる例を見ると，福島県の力士像などでは左手を腰にあて，一方右手を斜め上にあげあたかもシコを踏むさまを，和歌山県の力士像では両手の端が毀損しているがちょうど取り組みのさまを，それぞれ表現している趣がある。

念のため記せば，相撲の起源については，『古事記』の建御雷神（たけみかづち）と建御名方神（たけみなかた）の力くらべや，『日本書紀』の垂仁天皇７年の当麻蹶速（たいまのけはや）と野見宿禰（のみのすくね）の決闘④，の説話が有名である。また，皇極天皇元（642）年に，百済の使節を饗応するため健児（こんでい）に相撲を取らせたのが，史実の初現とされている。

ともあれ，今回の主たる調査対象の帝釈寺４号墳は，円墳ならば美浜地域の枢要地を占める有力豪族の墓，前方後円墳ならば美浜地域の首長墓と推定しうる。墳形・規模・形象埴輪の構成内容などに関して未確定のままの課題が残った。そうした今回の発掘であらたに派生した若干の問題は，将来の詳細な調査による解明にゆだねたい。

注

① 古墳の名称については，佐田１・２号墳とする例〔文化庁1980〕と，佐田古墳群帝釈寺支群１・２号墳とする例〔古川1988〕とがある。そうして，後者においては，既にそうした名称のもとに個別の古墳の出土品の一部も具体的に報告されている。ゆえに，佐田地区における詳細な古墳の分布状況がなお不分明であるけれども，以後の無用な混乱を避けるために，本報告では後者の呼称例に従った。

② 本古墳群の名称についても，塚原１・２号墳〔文化庁1980〕・塚原古墳群〔入江・森川1981〕とする例と，興道寺古墳群とする例〔山口1984・古川1988〕とがある。後者は，古墳が小字「塚原」のみにとどまらず小字「宮ノ下」から同「御前塚」にかけても散在している事実を重視したものかとも思え，既にそうした遺跡名のもとに個別の古墳の出土品の一部も具体的に紹介されている。そこで，本報告ではその呼称例に従った。

③ 塚田論文〔塚田1988〕掲載例に，その後の新発見例を追加した数値である。

④ 今回出土の力士埴輪とにわかに関連させて考えることは問題が残るが，参考までに付記しておく。野見宿禰は土師氏の先祖と伝承され，この土師氏は後に菅原氏と改氏したことは有名である。美浜町でも，奈良県藤原宮跡出土の木簡から三方郡弥美（みみ）郷（現町内の耳川流域）に土師安倍と名のる人物がいたことがわかっている。興道寺古墳群の所在する美浜町興道寺と東方の同町宮代の式内弥美神社との中間域を耳川が北流するが，そのまさに西岸部に「菅原」・「西菅原」の字名が存在する。示唆的できわめて興味深いものがある。

参考文献

入江文敏・森川昌和「獅子塚古墳」（『探訪 日本の古墳（東日本編）』1981年）。
入江文敏「興道寺窯址」（『福井県史（資料編13 考古）』1986年）。
川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第２号，1978年）。
『月刊文化財発掘出土情報』122号，1993年。
高橋克壽「若狭の埴輪と地域政権」（『躍動する若狭の王者たち』1991年）。
高野学「古墳をめぐる木製樹物」（『季刊考古学』第20号，1987年）。
塚田良道「力士埴輪の系譜について」（同志社大学考古学シリーズ Ⅳ『考古学と技術』1988年）。
中司照世「北陸」（『古墳時代の研究』９，1992年）。
『福井県史』（資料編１ 古代）1987年。
古川登「福井県嶺南地方の埴輪について」（『六呂瀬山古墳群』1988年）。
文化庁『全国遺跡地図（福井県）』1980年。
山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」（『福井考古学会会誌』第２号，1984年）。

若狭歴史民俗資料館 展示紹介

ミニ企画展『若狭の遺宝』 —— 平安・鎌倉の仏像 ——

◎会期　平成５年５月４日(火) ～ ５月３０日(日)　（入場は 9:00~16:30まで）
〔 休館日．毎週月曜日　入場料．常設展入場料(100円)に含む〕

内容　若狭の各地には，その風土に育まれた多数の文化遺産が伝えられていますが，中でも古代から都との密接な関係において，あるいは大陸からの玄関として発展したと言われる仏教美術に優れた特色を見出すことができます。

今回は，多数の仏教美術遺宝の中より平安末期から鎌倉時代かけて造立された仏像・仏画に着目し，当時の神仏習合思想をも踏まえながら紹介致します。

◎講演会　『神仏習合と仏像』　講師．長坂一郎 先生（福井県立博物館）
日時．平成５年５月１６日（日）　会場．当館講堂 13：30 より

（芝田寿朗）

編集後記 本号の内容以外にも，今回の詳細分布調査により，多くの新事実が判明している。ただ，企画のみ豊富にあるが，『たより』の作成が追いつかぬのが現状である。簡便なミニ誌といえども，諸機関等との交流のより一層の活発化により，少しでも益するところの多い内容をめざしている。諸賢のご指導・ご協力を，お願いする次第である。（N）

若狭歴民だより　第 2 号
発行所　福井県立若狭歴史民俗資料館
〒917-02　小浜市遠敷(おにゅう)2丁目104番
TEL 0770-56-0525　FAX 0770-56-0837
発行日　平成 5 年 3 月 15日